

モンゴル国立医科大学研修

国際保健医療研修

実施日：平成29年3月24日～平成29年3月31日
 実施場所：ウランバートル（モンゴル）
 発表者：医学部 保健学科 看護学専攻3年 布施川敦子

概要



発展途上国での保健医療・保健看護教育・チーム医療などを学び、モンゴル国立医科大学(MNUMS)の学生の保健医療・教育に対する積極的な態度、文化的交流ならびに国際活動を行う上での語学力の重要性を学ぶことが目的である。

参加者：6名 群馬大学医学部保健学科看護学専攻 4名
 群馬大学大学院保健学研究科教員 2名

スケジュール

3/24	ウランバートル到着	3/28	第三病院見学
3/25	ホームステイ	3/29	地区病院 / 家庭保健医療センター見学
3/26	ホームステイ	3/30	学生発表(日本の保健医療システム / 母子保健)
3/27	モンゴル国立医科大学 / 母子病院見学	3/31	帰国



アジア大陸の地図【白地図専門店】
<http://www.freemap.jp/item/asia/kouiki2.html> (参考日2017年3月17日)

主な活動



図1 MNUMSにてスタッフと



図2 第三病院



図3 食事介助の演習の様子



図4 見学時の様子

<病院見学>

モンゴルの病院は家庭保健医療センター、地区病院、総合・専門病院の3つのレベルに分かれている。研修を通して3レベルの病院を見学した。(図1,4)JICAなどの海外からの支援も入っているところが多く、3次レベルである総合病院は設備などが日本の病院に近い印象を受けた。(図2)

どの施設でも気になったのが、病室がカーテンで仕切られておらず一つの大きな空間にたくさんの患者がいる点である。検査の様子など様々な場所を見学させてもらったが、プライバシーに配慮することよりも医療者にとってやりやすいようにすることを優先しているように感じた。

MNUMSは看護、助産、理学、作業、伝統医療の5分野の専門職養成を目的とする医療大学であり、800人ほどの学生がいる。演習時に必要な物品が充実しており、人材不足のため看護師になってからすぐに働けるよう、実践に力を入れているように感じた。(図3)

<ホームステイ&学生交流>

日本で看護師として働きたいと思っている学生達がホストファミリーとなり、お世話をしてくれた。首都のウランバートルから1時間ほど離れた郊外へ連れて行ってくれ、ホーショールを作ったり(図5)、乗馬体験、ゲル(図8)を訪問した。想像していたモンゴルの大草原を自分の目で直接見て体験することができた。

日本で働きたいということもあり、英語より日本語の方が通じることもあったが、日本語・英語・モンゴル語を交えた活発な交流をすることができた。モンゴルでは家族同士でも友達同士でも手をつないだり、腕を組んで歩くことが当たり前であるぐらい、人と人の距離が近い。モンゴルの学生と一緒に歩くときには手をつないで歩くことで、短い時間でも親密な関係を作ることができたように思う。(図6)



図5 モンゴル料理作り



図6 モンゴルの学生達と



図7 モンゴルの大草原



図8 移動式住居(ゲル)



図9 ウランバートル市内

謝辞

今回の研修を指導・引率していただいた群馬大学大学院保健学研究科の篠崎博光先生、牧野孝俊先生、モンゴル国立医科大学の先生方、施設訪問先のスタッフの方々、ホストファミリーやMNUMSの学生に感謝申し上げます。このような素晴らしい機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

NPO法人 メータオ・クリニック支援の会主催 スタディーツアー 海外研修



実施日：平成28年9月5日～平成28年9月10日
実施場所：タイ（ターク県・メト郡）
発表者：医学部 保健学科検査技術科学専攻3年 忠木沙耶香

1.概要

NPOメータオ・クリニック支援の会(JAM)は、シンシア・マウン医師が今から20数年前に、タイ・メトで開設したメータオ・クリニックを支援するために、2008年に発足したNPOである。このスタディーツアーは難民キャンプや移民学校を訪問し、タイ・ミャンマー国境に生活する難民の人たちの置かれている状況を体験・実感し、クリニックを取り巻く社会状況や医療、教育に関する支援活動、それらが抱える問題・課題などについて、考えることを目的としている。

私はこのような地域の人々の医療や生活状況について、実際に現地に足を運んで学びたいと思い、このスタディーツアーに参加した。そこでの活動や学んだことについて報告する。

2.活動内容

日付	スケジュール
9/5	スワンナプーム空港集合、ドンムアン空港を経由してメト空港へ タイ・ミャンマー国境散策、ガイダンス
9/6	メータオ・クリニック見学、シンシア院長との座談会 ワークショップ「国際保健」/JAM代表小林潤教授 難民キャンプについてのガイダンス/難民キャンプ支援団体SVA
9/7	移民学校訪問、ゴミ集積所見学
9/8	タイ公立病院見学、ミャンマー視察
9/9	メラ難民キャンプ訪問
9/10	全体の振り返り、 メト空港発、ドンムアン空港を経由してスワンナプーム空港へ



図1 タイ国(ターク県)の地図

タイ国政府観光庁 より(2017/1/22)
<http://www.thailandtravel.or.jp/area/tak.html>

メータオ・クリニック (図2)

1989年に設立され、ミャンマーからタイへ貧困や戦火のため逃れてきた難民・移民に対して無償医療及び、社会保障サービスを提供している。ここでは施設見学とシンシア院長のお話を聞いた。世界中の様々な団体から医師や看護師が派遣されているが、主に診療を行なっているのは地元の人々で、医師からトレーニングを受けたmedics(医師資格はない)と呼ばれる人々である。地元の人々が診療を行うことで難民や移民は安心して医療を受けることができていると感じた。また院内には支援団体によって作成された、手洗いの仕方や感染症について等、公衆衛生に関するポスターが多数あった。

移民学校(HOPE, SKY BLUE) (図3)

HOPE校ではメータオ・クリニックのスタッフが手洗い教育を行っているのを見学した。蛍光塗料を用いた手洗いチェッカーや絵や図を使用してわかりやすく工夫された健康教育を行っていた。子供達と折り紙やシャボン玉などを使って遊び、日本のおもちゃを初めて見る子供達は可愛く、とても楽しかった。また、文房具や衣類などの寄付も行なった。

SKY BLUE校は主にゴミ山近くで生活する子供達が学んでいる。ゴミの中から空き缶やペットボトルなどを集め町に売りに行き、そのお金で生活していた。



図2 メータオ・クリニック



図3 移民学校HOPE

難民キャンプ

メラ難民キャンプはミャンマーのビルマの人々が生活している。タイ国内にあるため、行政的にはタイ国の内務省の管理下にあり、関係者以外は特別な申請がなければ立ち入ることができない。キャンプ内には病院や学校、マーケットがあった。しかし難民キャンプから出ることや就労も許可されていない為、生活が困難な家庭もあると話を聞いた。

3.研修外の活動

研修外の時間ではメト郡の他にミャンマーやバンコクも訪れた。メトからミャンマーのミャワディーには国境の橋を渡って行くことができる。国境周辺は不毛地帯となっていて、ミャンマーからタイに出稼ぎに、船で川を渡って不法入国する人も見られた。ミャンマーでは仏教の伝統的な寺院を見学し、とても綺麗でユニークなものもあった。タイでの移動手段は主にトゥクトゥクやバイクを使い、自分で値段を交渉したり、日本では出来ない体験をした。

また、今回一番驚いたのがタイ国内の貧富の差である。観光地であるバンコクはとても栄えていて交通量やマーケットも多く賑わっていたが、研修で訪れたメトはタイの北西にあり、英語もかろうじて通じるという状況であった。そのため意思の疎通や必要なものを揃えるのも難しく、ここで1週間生活出来たことで自分が成長できるいい機会となった。

4.総括

今回のスタディーツアーでは国際保健、医療について学ぶことができたのはもちろん、難民や移民の生活について知ることができた。今まで話でしか聞いたことがなかったものを実際に見て状況を知り、もっと普段から支援について考えて行くべきであると実感した。医療についても必要最低限の器具は揃っているものの、環境が整備されていなかったり、公衆衛生について周知することの大切さがよくわかった。

また、ワークショップやシンシア院長との対談で気づいたことも多々あった。支援が行き届くためには今回学んだことを周りに伝え、自分から呼びかけて行くことが重要であると感じた。今回学んだことを生かし、もっと世界に目を向け、このような問題について自ら行動できるように日々努力していきたい。

5.謝辞

スタディーツアーを企画してくださったメータオ・クリニック支援の会代表である琉球大学医学部の小林潤教授をはじめ、JAM事務局の皆さんや現地派遣員の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。また、その他サポートしてくださった先生方、本当にありがとうございました。



図4 ミャンマーとタイの国境



図5 クロコダイル寺院



図6 メトのお店



McGill大学留学体験

群馬大学短期留学プログラム

実施日：平成28年8月15日～平成28年8月29日
 実施場所：McGill大学（カナダ・モントリオール）
 発表者：医学部 保健学科 理学療法学専攻3年 松本朱莉



<プログラム概要>

この企画は、群馬大学保健学科理学療法学専攻の卒業生がMcGill大学大学院で研究を行っている。その先生と大学の専攻の先生方が今回のプログラムを計画して下さった。

目的: 国際的に質の高い研究活動に触れ、実際に研究のアシスタントを務めることにより、リハビリテーション分野における最先端の研究に取り組む研究者を目指す動機づけ、課題発見を目的とする。

期間: 2016年8月15日～2016年8月29日

参加人数: 群馬大学保健学科理学療法学専攻3年4人

◎事前研修

5月11日～8月8日

(1)プレゼンテーション準備

【テーマ】

①日本の理学療法教育卒前・卒後

②群馬大学の紹介

③日本の医療制度と災害医療

(2)現地で関わる研究の関連論文抄読

(3)三次元動作解析装置の使用の確認

◎滞在中のプログラム

8月15日～8月29日

(1)研究所見学

(2)研究アシスタント

(3)文化的交流

◎事後研修

9月7日～10月13日

(1)報告会プレゼンテーション

(2)報告書作成

◎研究・施設見学

McGill大学では**Virtual Reality**が重要視されています。

理由としては、

①患者が直接様々な場面に出向く必要がなくなるので安全であるということ。

②ゲームのような感覚で取り組むことができるため患者のモチベーションが上がるということ。

③環境設定が自由にできるため様々な場面を考えリハビリができるということなどが挙げられます。

このVirtual Realityでの研究を行うために欠かせないのが**Head Mounted Display(HMD)**です。HMDと動作解析装置を用いた研究が多く行われていました。HMDで人工的に環境を作り、動作解析装置で首の動きに合わせて視覚情報を変える。なるべく実際の動きに近づけることと、より簡単にして臨床に生かすことが今後の課題です。

トロントのリハビリテーション施設(UHN)にも見学に行きました。UHCの社長はPTではなく、エンジニアです。そのため装置なども一般的なリハビリテーション施設とは異なりました。ここではエンジニア・セラピスト・デザイナーが働いています。大規模な設備も多く、ここでしかできない研究も多く行われていました。理工学とリハビリテーションがここまで深く結びついているのを初めて見る事ができました(図1.2)



図1 VR

◎研究アシスタントの経験

人の体には関節がたくさんあり、それにより運動の方法は何通りもできます。これをここでは自由度といいます。今回の研究では、目標点へのリーチ動作における自由度の問題を脳卒中の方と健常者で比較しました。

床反力計に乗って閉眼で上肢長を超える目標物へのリーチを160回繰り返し行う実験をしました。リーチ動作中無作為に選ばれた試行は装置によって臀部に外乱が加えられます。バランスを維持するためのステップをさせるために臀部を押します。それぞれの状態と、グループ間の動作の運動学と力学を比較します。

今回の被験者は脳卒中を発症し、軽度左片麻痺となった50代くらいの男性です。研究装置は手作りのもので、操作の手伝いをさせていただきました。また測定後のデータ解析もやらせてもらいました(図5.6)。



図5 研究の様子



図6 研究装置



図3 トロントでの研究見学



図4 UHNの前にて

◎カナダで働いているPTの方のお話

カナダで働いているPTの方とお話する機会も多くありました。日本とカナダの違いについて貴重なお話を聞くことができました。

なかでも特に印象深かったのは、カナダにはPTアシスタントという職があり、患者さんの治療をするのはこのPTアシスタントであるということです。PTアシスタントには免許がなくてもなることができます。では、PTは何をするのかというと、おもに評価です。評価を行い、それに基づきアシスタントにどのような治療を行うのか指示をだします。

この他にもカナダではPTにも開業権があり、自分のクリニックを持つことができます。ここには記載しきれないですが、日本とカナダでは理学療法・理学療法士というもののあり方が大きく違います。なぜこうした違いが生まれるのか疑問に思いました。

◎文化的交流

カナダの方々を暖かく受け入れてくれました。

一緒にお昼ご飯を食べたり、研究の被験者になったりしました。ご飯は量は多くて、味が濃いものが多かった気がします...

大学院生の研究発表を聞いた時には、私たちの授業風景との違いに驚きました。発表中に聴衆から拍手がわいたり、納得する声が聞こえたり、質問がずっと飛び交っていたりと、活気あるものでした。

現地の学生と休日を過ごしたときは、マーケットやショッピングモールに連れて行ってもらいました。マーケットではたくさんの人が声をかけてくれました。日本語が話せる人が多いことに驚きました。

また、ナイアガラの滝に連れて行ってくださいました。テレビで見えていたよりも壮大で、感動しました。



図7 現地の学生と



図8 ナイアガラの滝にて

◎感想・謝辞

今回この研修に参加して本当に良かったと思います。勉学の面でもそうですが、それ以外のこともとても多く学びました。

研究の楽しさ、地道さ、苦しさ。少しずつではありますがすべての側面を見ることができました。それをふまえて今研究の道にすすもうか迷っています。今後もっと多くのことを学んでいくうえで考えていきたいです。本当に自分のやりたいことは何であるのかをしっかりと考えて進んでいきたいと思いました。

人の優しさ、温かさにも触れました。どんな人であっても全く分かり合えない事はないのだと知りました。

何かを得たいと思いこの研修に参加しましたが、求めていた以上にたくさんのことが学べました。この経験を生かすも殺すも自分次第だという事はわかっています。今までの甘さに負けないよう、この経験を忘れずに頑張りたいです。

今回このような研修を計画して下さった先生方、現地で面倒を見て下さった方々に深くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

マラリアの基礎とワクチン開発の現状

先端研究学際講演会

実施日:平成28年1月16日

実施場所:群馬大学昭和キャンパス 保健学科中央棟3階4番教室

リーダー:医学部保健学科看護学専攻2年 野添冨夏 医学部保健学科看護学専攻2年 山田怜那(副)

発表者:医学部保健学科作業療法学専攻2年 品田恵

講演者:群馬大学大学院理工学府分子科学部門 奥浩之先生

1.概要

今年度の医学部主催の先端研究学際講演会では群馬大学理工学府分子科学部門の奥浩之先生をお招きしてマラリアの基礎とワクチン開発について講演していただいた。マラリアは現在、熱帯・亜熱帯地域にのみ存在する病気ではない。グローバル化が進む現代においては日本においてもついて興味を持ち、その研究をしている奥先生の存在を知り、講演会を依頼した。奥先生はマラリアの検査キットとワクチンの開発研究に携わっており、マラリアの予防や対策について材料化学の視点から貢献している。海外で感染したり、温暖化の進行によって国内で再流行してもおかしくはない感染症である。私たちは医学を志すものとして世界的な問題であるマラリアに

この講演会にはGFL医学部2年生(医学科:5名、保健学科:5名)とGFL医学部1年生(保健学科:1名)が参加した。少人数での参加型講義形式とした。

2.講演内容

a)マラリアの基礎

マラリアはハマダラカを媒体としてマラリア原虫が媒介することによって引き起こされる感染症である。マラリア原虫のスポロゾイトが肝細胞内に入り、増殖、赤血球に入り増殖、細胞分裂をすることで人の症状としては発熱が現れる。現在では91の国と地域で流行しており、2015年には罹患者が2億1200万人おり、その90%がアフリカで発生している。同年の死亡者数は42.9万人と推定されている。その92%がアフリカで亡くなっており、71%が5歳未満である。

人に感染するマラリア原虫には熱帯熱マラリア、三日熱マラリア、四日熱マラリア、卵形マラリア、サルマラリア(二日熱マラリア)の5つがある。日本もマラリア流行地であったが、1950年代に国内の土着マラリアは制圧された。群馬県では渡良瀬川流域の湿地帯が流行地の一つであった。

マラリアは感染すると発熱・脾腫・貧血などの症状を呈し、特に熱帯熱マラリアにおいて、免疫の無いヒトが感染したような場合、適切な治療を受けることができないと急性の経過をとり、発症後1~2週間で脳症・腎不全・血小板減少・消化管出血・心不全等を起こして死亡することがある。

b)マラリアワクチンについて

マラリアには多くの治療薬があり、適切な治療を受けることができれば治る感染症である。しかし治療薬には薬剤耐性を持つマラリア原虫が出現してしまうため、対策の切り札としてワクチン開発が望まれている。ワクチンのターゲットには肝内期ワクチン、赤血球期ワクチン、伝播阻止ワクチンがある。マラリアは一度感染すると二度とかからない感染症である麻疹や天然痘とは異なり、ヒトの防御免疫を回避する寄生適応メカニズムを持つためワクチン開発が難しい。また、マラリアは流行地では慢性疾患であるが、非流行地では急性疾患であることもワクチン開発を難しくしている要因として考えられる。



図1.全体写真

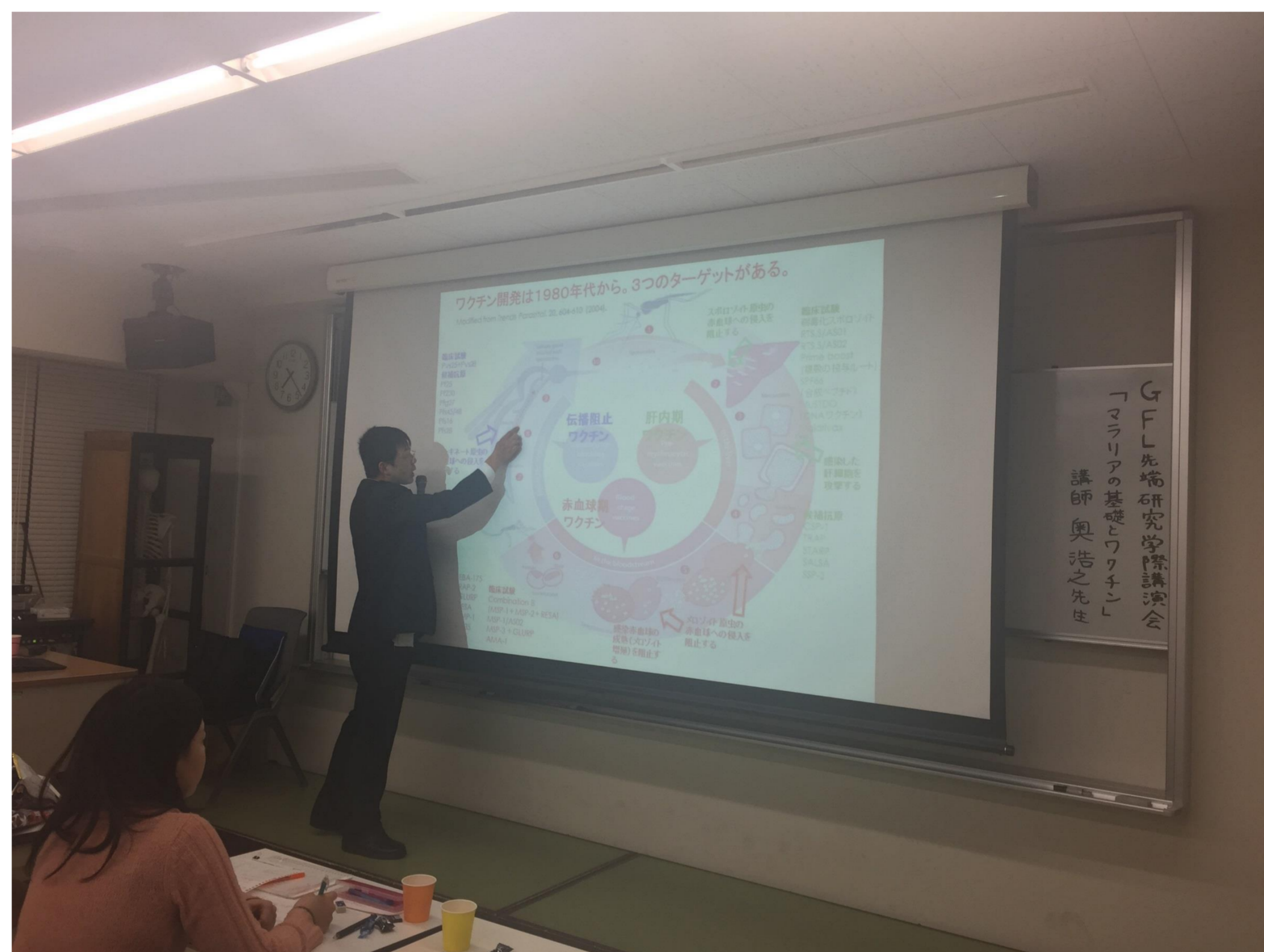


図2.講義の様子

3.考察

今回の講義を通してマラリアの現状、治療や予防について学ぶことができた。マラリアの簡単な感染メカニズムや治療については大学の講義で少し学習したが、今回は講義で習ったものよりもより深く、実際のマラリア感染の状況を学ぶことができた。

マラリアが過去には日本でも流行していたことを私は初めて知り、今後グローバル化が進む中で日本でも再びマラリアが流行することはあり得ると考えた。また、マラリアに感染した場合の治療薬のことだけを考えると、薬剤耐性を持つマラリア原虫の出現のように治療薬のみの対策では限界があるため、流行地域での検査技術の普及や感染予防啓発についての教育活動など広く総合的に対策を考える必要のあることがわかった。そのためにもこれからはワクチン開発や検査キットの開発が重要であると感じた。将来、自分がマラリアであると考えられる患者さんが来た時に慌てず対処できるよう、今回学んだことを活かしてこうと思う。

4.謝辞

この度はお忙しい中、講演をしてくださった奥先生、また講演会を開催するにあたりお力添えを頂いた保健学研究科の川島先生に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

アフリカ・スーダンでの地域医療における 保健システム構築への挑戦

先端研究紹介講座

実施日：平成28年11月9日
実施場所：群馬大学昭和キャンパス 臨床大講堂
リーダー：医学部保健学科検査技術科学専攻1年 大野慈
講演者：認定NPO法人ロシナンテス 理事長 川原尚行氏

＜Ⅰ.概要＞

今回の講演では、認定NPO法人ロシナンテスの理事長である川原尚行氏(以下、川原氏)をお招きして、ロシナンテスを設立することになった経緯やロシナンテスの活動内容についてご講演をいただいた(図2,図3)。日本から遠く離れたスーダンの地で、川原氏が何を思い、何を指して活動を続けていられるのかを知る、貴重な時間であった。普段はスーダンで活動を行っている川原氏が、わざわざ日本に帰国して講演に来てくださるということで、講演会にはGFL生のみならず、医学部の学生や教員や、そして群馬大学医学部附属病院職員など幅広い方々が参加した。

講演会までの準備段階では、ロシナンテスの事務局長である星野賢一郎氏と講演会に関する連絡を、メールを用いて綿密に行った。また、講演会ポスター作成(図1)やGFL学生に対するMoodleにおける呼びかけなど、講演会参加者募集のための広報活動を積極的に行った。加えて、会場のリハーサルなど、川原氏がスムーズに講演できるよう、細かな準備を行った。



図1. 広報用のポスター

＜Ⅱ.講演内容＞

1.ロシナンテスができるまで

川原氏は福岡県北九州市出身である。九州大学医学部卒業後に九州大学大学院第二外科(現：消化器・総合外科)に入局し、同外科および広島赤十字・原爆病院で研修をされた。そして、九州大学大学院を修了後に外務省に入省し、在タンザニア日本大使館勤務を経て在スーダン日本大使館に着任する。

川原氏の着任当時、スーダンは「テロ支援国家」として、日本政府による医療支援は不可能な状況にあった。その状況を改善するため、2005年に川原氏は外務省を退職して、同年4月よりスーダンでの医療活動始める。翌年5月に北九州市に「NPO法人 ロシナンテス」を設立し、同年8月、スーダン共和国政府から国際NGOとして正式に登録され、巡回診療を始める。診療所の建設、井戸の整備による飲み水の改善、学校建設と村落助産師の育成、アフリカ向けの医療機器の開発など様々な活動を行っている。ロシナンテスはこうした活動を「医療」の一部と捉え、活動をしている。

2.Trial and Error ～「まずやってみる」ことの大切さ～

川原氏が単身で始められたスーダンでの支援活動であったが、困難なことが多々あった。スーダンの人たちのために日本から輸送した薬の認可が下りず、やむなく焼却処分しなくてはならなかったり、活動を停止せざるを得ない状況に陥ったこともあった。

そこで川原氏は、**現地の人の中に飛び込んで、現地の人に信頼してもらう**ことから始めようと考えられた。海外から突然やって来た医師ではなく、信用できるスーダンの医師になることで、スーダンの人々に求められているニーズ、自らが何をしていく必要があるのかということが明白に把握できると考えたのである。

その結果、川原氏の努力は実を結び、活動が円滑に進むようになっただけでなく、スーダンに住む人たちの衛生環境が改善し、女性たちの地位が向上するなど、生活水準全般がより良くなった。



図2.講演の様子Ⅰ



図3.講演の様子Ⅱ



図4.川原氏と私

3.「ロシナンテス・モデル」

当初のロシナンテスの活動は、支援活動ということで、ロシナンテスがスーダンの人たちに医療を提供するという形で活動していた。その後、支援する地域の拡大に伴い、医療を提供するという支援から、そこに住む人たちが自ら「医療」を行っていくことを可能にする支援へと活動形態が変化した。これは「ロシナンテス・モデル」と呼ばれている。

スーダンのガダーレフ州ハサバツラ村がその例である。村の診療所を再建して、衛生的な水を得るために井戸を整備し、女子のための学校を建設し、電気を町に普及させる。村人は「村が街になった」と表現している。

ここまでの活動はロシナンテスと村人が協力して行う。ここからは、ロシナンテスが別の村へ活動拠点を移しても、ハサバツラ村の村人たちが自分たちだけで「医療」を継続していくことができるように教育を行っていく。村人の自立こそが「ロシナンテス・モデル」の最終目標であると言える。

4.東日本大震災・熊本地震への支援

ロシナンテスは、2011年3月11日に発生した東日本大震災、2016年4月14日に発生した熊本地震への支援も行っている。

ロシナンテスは、以前宮城県名取市閉上(ゆりあげ)の小学校の子どもたちとスーダンの子どもたちとの交流会兼運動会を行った。川原氏が見てくださった運動会の映像からは、運動会後に閉上の子もたちとスーダンの子どもたちが互いに溢れる笑顔を交し合う姿が見受けられた。

川原氏は、スーダンの、とある一つの村で「医療」を行っていくことと、大地震の被災地の、とある避難場所で「医療」を行っていくことには共通点があるとおっしゃっていた。双方ともに最も大切なことは、村や被災地のコミュニティのなかに飛び込んでいきコミュニティの一員として「医療」を行っていくことだと川原氏は教えてくださった。また、この二つの活動は、「地域包括ケア」のモデルとなるとおっしゃっていた。

＜Ⅲ.感想＞

川原氏の情熱に溢れたご講演から、挑戦することへの勇気と、失敗や間違いを恐れない心を持つべきだということをお教えた。講演を聴講したGFL2016年度生をはじめとする全ての学生が、それぞれの多様な感性で川原氏の情熱を受け取り、これからの将来につなげていくことができるのではないかと考えている。

講演会の準備にあたって、ロシナンテスへの講演依頼のメール、ポスターの作成、講演会当日までのスケジュールの作成など、ひとつのプロジェクトを総合的に企画していく経験ができたことは、非常に有益であったと考えている。その中で、医学部GFLの仲間と役割を分担し、ひとつのチームとして活動をしていくことが円滑に行かず、お互いに手間取ってしまうことが多々あった。講演会をチームのリーダーとしてまとめていくために何が必要なかを考えていくことがこれからの課題である。

＜Ⅳ.謝辞＞

多忙なスケジュールのなか、非常に貴重な講演をしてくださった、川原氏に心から感謝します。講演会のためにご尽力くださったロシナンテス事務局長の星野賢一郎様、ロシナンテスを紹介くださった本学の辻村弘美先生、川島智幸先生、準備の段階でサポートくださった国際交流課の皆様、準備に関して細かなアドバイスを与えてくださった保健学科教務係の皆様、医学科教務係の皆様へ感謝します。本当にありがとうございました。



GFL生から見た 平成28年度医学部外国人留学生との懇談会 国際交流



実施日：平成28年11月29日
実施場所：昭和キャンパス 生協食堂
発表者：医学部保健学科看護学専攻1年 藤谷亜実

I.目的

昭和キャンパスにいる留学生は、普段から研究室にいますので、医学部生やほかの研究室の留学生と交流できる機会をあまり持たない。よって留学生と一般の医学部生や大学院生、教授などと交流できる機会を作り、お互いの国の文化などを紹介し、理解しあうというのがこの会の目的である。

II.内容

1)次第

司会 学務課

1. 医学系研究科長・医学部長挨拶 (図1)
2. 保健学研究科長・保健学科長挨拶
3. 来賓挨拶
前橋市国際交流協会副会長
前橋ロータリークラブ会長
4. 来賓紹介
5. 乾杯 (図2)

医学系研究科教務委員長兼
国際教育・研究センター運営委員

6. 歓談
7. 閉会の挨拶

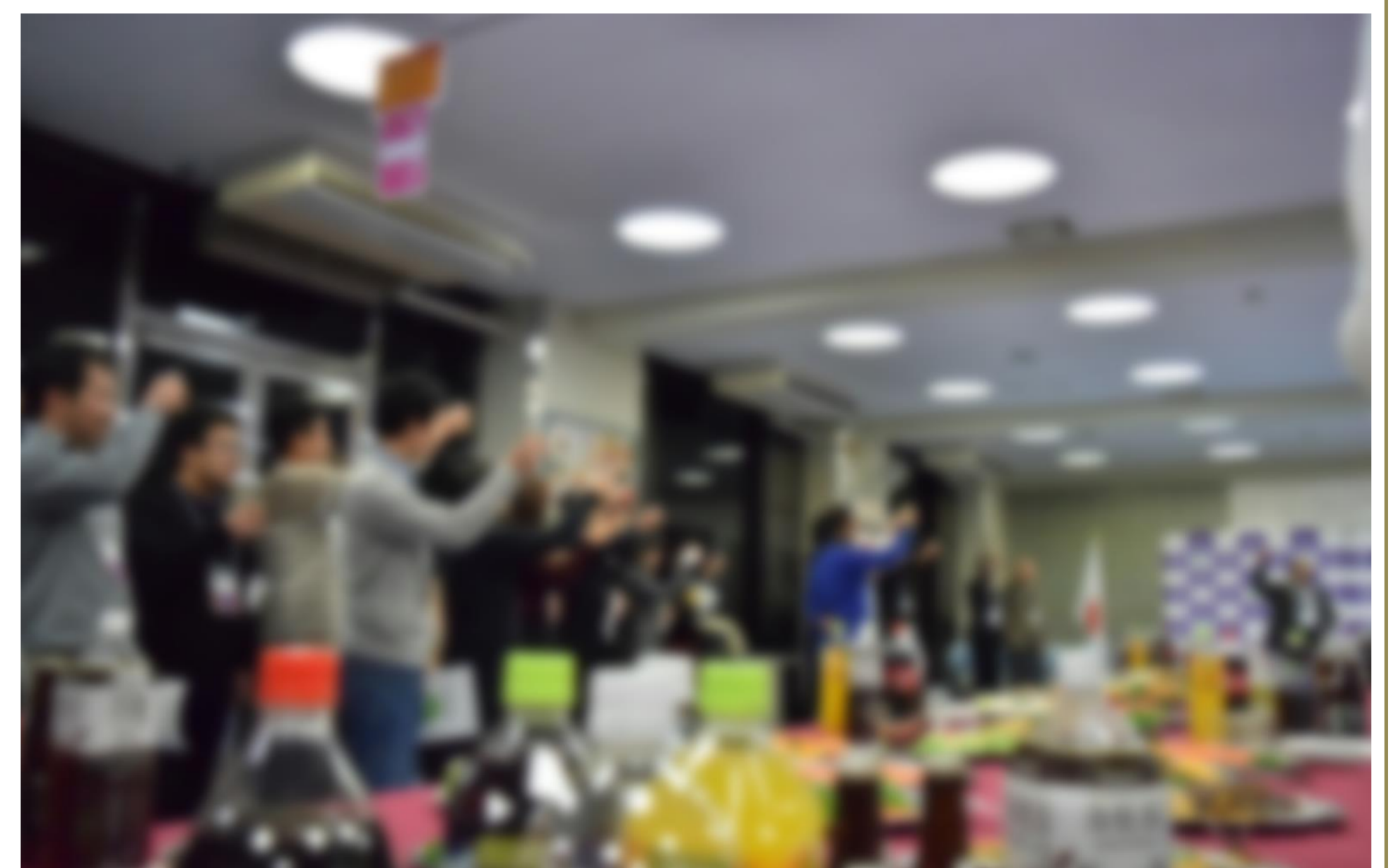
国際教育・研究センター運営委員



(図1)開会のあいさつの様子

2)活動内容

様々な国から留学に来ている医学部の留学生、日本人のチューターの学生、GFL生、教授などが集まった。留学生の出身国は、マレーシア、中国、パラグアイ、モンゴル、インドネシア、ベトナム、ネパール、韓国、スリランカ、フィリピン、アメリカ合衆国、タイ、インド、シリアがあり、それぞれの母国語は異なるが、基本的に会話は英語が使われていた。多くの種類の食事とドリンクが用意されており、乾杯の後はすべて自由時間であった。一人一人が出身国の国旗と名前が書いてある名札を下げており、立式スタイルであったので歩き回り、名札を見て話しかけることが多かった。また、希望者が自国のダンス(図3)や得意のギターを披露し、母語で歌ったりなどをして文化を伝えあった。それぞれが初めて見るほかの国のダンスや歌でも、とても盛り上がっていた。



(図2)乾杯の様子

III.感想

今回の懇談会を通して大切だと思ったことが2点あった。

【1点目...自分から進んで話しかける積極性】

自分の話す英語に全く自信がないのに、日本語を話せる人が少ないという環境に私は慣れていなかった。初めは戸惑い、相手に気を使われて日本語を話させてしまうことも多かった。しかし、日本語を勉強している留学生が一生懸命慣れない日本語を話している姿を見て、自分もこのように一生懸命伝えようと思えば、例え間違っていたとしても相手は理解しようとしてくれることを知った。

【2点目...自分の意見をしっかりと持つこと】

どの留学生と話していても自分のやりたいことをはっきりと言え、どの分野に関しても自分の意見を持っていた。言語の問題以前に自分の意見がないと発言もできないので、コミュニケーションも取れなくなる。そうならないためにも日頃から様々な分野に興味関心を持ち、自分の意見をしっかりと持ち、表現することが大切であると感じた。



(図3)ダンス披露の様子

IV.総括と今後の展望

今回GFLとして懇談会に参加した学生は5人であった。将来国際的に活躍できるリーダーになるために英語での会話ができるのはもちろんだが、今回参加して必要だと感じたのは**言語力だけではない**と感じた。自分の国とは全く違う文化や考え方を持つ人と接すると、必ずカルチャーショックを感じたり相手を理解しがたいと感じる場面があるだろう。そのような負の感情を少しでも小さくするために日ごろから**様々な国の文化や考え方を共有**していかなければならない。そのような力を身に着ける場としても、今回の懇談会は貴重な場となった。また同じ分野に進む先輩ともいえる人たちと話すことで、インスピレーションを受け、将来の選択肢を新しく発見することができた。かしまりすぎない雰囲気であったので、日常会話から専門的な話まででき、**他人とかかわることで自分にとって新しい発見を得られる**ことを再認識し、世界で活躍するためにも楽しく会話しながら必要な力をつけることができる場を、これからも積極的に見つけ参加していきたい。

平成28年度 留学生懇談会 参加国一覧											
番号	国名	国旗	番号	国名	国旗	番号	国名	国旗			
1	マレーシア		6	ベトナム		11	アメリカ合衆国				
2	中国		7	ネパール		12	タイ				
3	パラグアイ		8	韓国		13	インド				
4	モンゴル		9	スリランカ		14	シリア				
5	インドネシア		10	フィリピン		15	日本				

(図4)参加学生出身国一覧